

〈原著論文〉

エミリー・ディキンソンと エリザベス・ビショップの“Art”をめぐって

松 本 明 美*

Emily Dickinson's and Elizabeth Bishop's "Art"

Akemi Matsumoto

要旨：アメリカの詩人、エミリー・ディキンソンとエリザベス・ビショップは、活躍した時代も生育環境もまったく異なるものの、手紙好きであったなども含めて、詩の着想や思想が共通している部分が多い。例えば、“Art”をモチーフにした詩では、二人の詩人たちに共通した思想、例えば物事の着眼点や芸術に関する考え方に相似した点が見られる。しかしながら、後発詩人であるビショップは、ディキンソンの芸術的価値観から脱却して、自身が貫いた旅のテーマを織り込ませながら、自分独自の新たな芸術観を構築した。こうして、二人の詩人たちは、言葉に思いを込め、それぞれ独自の詩のスタイルを確立していったのである。

Abstract： This paper considers two American poets, Emily Dickinson and Elizabeth Bishop, as well as the motif of “Art” in their works. Dickinson’s background was markedly different from Bishop’s: the former retreated into seclusion almost all her life and was devoted to writing poems, whereas the latter liked to travel and mingled with all kinds of people. However, the two poets shared a commonality: they liked to write and exchange letters. In fact, both poets left massive collection of letters, which have proven to be a precious resource for contemporary researchers. Reading their poems, we find an interesting point in common, namely, the use of the word, “Art.” Therefore, it may be useful of to examine the meaning of “Art,” as seen in the works of both these poets, and to study how Bishop was affected by Dickinson’s poems.

Key words： 詩 poetry 詩人 poet 芸術 art

I 序 論

エミリー・ディキンソン (Emily Dickinson, 1830-86) は、保守的な土地柄のマサチューセッツ州アマーストで、自分の名前が世に知れ渡ることなくひっそりと生涯の幕を閉じた。しかし、彼女の死後に偶然発見された1800編近い詩が全詩集として出版され、今では世界各国で研究者や読者の耳目を集めるまでになっている。そして今世紀に至るまで、ウォルト・ホイットマンやロバート・フロストと並ぶ、19世紀アメリカ屈指の大詩人としての地位を確立し、現在に至っている。

一方、本考察のもう一人の大詩人、エリザベス・ビショップ (Elizabeth Bishop, 1911-79) は、マサチューセッツ州で産声を上げたが、ディキンソンとは真逆と言って

良いほどの人生を送った。ディキンソンとは言えば、父親の屋敷にほとんど引きこもり、家事に勤しみながら、詩を書き溜めていた。ところが20世紀の時代を生きたビショップは、生後わずか父を亡くし、母親は入退院を余儀なくされた。このような不安定な家庭環境の中で育ったにも関わらずにビショップは、持ち前の感受性に磨きをかけ、大学に入学してからは、文学に覚醒し、特にマリアン・ムーアとの出会い、それからロバート・ローウェルとの出会いが、詩人としてのビショップの運命に大きく影響を与えたと言える。そして、紆余曲折を経て晩年には、ピューリッツァー賞を初めとする数々の賞を受賞した。

このように、これら二人の詩人たちの人生を俯瞰してみると、ビショップは家庭環境にこそ恵まれなかったも

受付日 2021. 5. 14 / 掲載決定日 2021. 10. 6

*関西福祉科学大学 健康福祉学部 教授

の、その後の人生で出会った多くの知己との交流が、やがて 20 世紀を代表するアメリカ詩人になることにつながった。なぜならビショップは、内向的なディキンソンとは異なり、比類のない抜群の行動力で培った幅広い知見や視野を糧に、数々の詩を創作したからだ。特にビショップは、旅をこよなく愛した詩人で、世界中を旅し、そこで見聞きしたものを題材にして詩を書いたのである¹⁾。

一見、相違点の多いこれら二人の詩人たちの共通点は何か。一つ挙げるとすれば、それは両詩人たちが、大の手紙好きであったということだ。ディキンソンの場合、兄や妹、T. W. ヒギンソン、ヘレン・ハント・ジャクソンなどのごく限られた知人たちと書簡を交わしていた。それは、ディキンソンの 3 巻本の書簡集²⁾として、今も重要な学術的資料の一つになっている。そして、ビショップの方も、ムーアやローウェルなどの詩人たちと膨大な書簡による交流を行った。その書簡は今も残されており、後で考察するビショップの有名な詩、“One Art”からそのままとって、“One Art”というタイトルで出版されている³⁾。その書簡集を紐解いて見れば、ディキンソンの詩を読んでいた形跡が発見できる。特に興味深いのは、ビショップが、ジョンソン版によるディキンソンの詩集を気に入って、「高く評価している」(One Art, 333)という明確な印象を書き残していることである。一見すると、ビショップがディキンソンの詩型や言葉遣いをまねることはなかったように思えるが、精読を進めると、ビショップがディキンソンの詩を意識していたのではないかと思える箇所を、ビショップの詩から発見することができる。そこで、本考察では、ディキンソンとビショップが、詩に対してどのような持論を持っていたのかを探ることにする。それにより、ディキンソンが次世代の詩人の一人であるビショップに、どのような影響を及ぼしたのかを考察する。その考察をより具体的に論証していくために、二人の詩人たちが強く意識した、“Art”が関係する詩をそれぞれから選ぶことにする。考察の最後では、ディキンソンがアメリカ最大の詩人と言われた理由の一端を検証したい。

II ディキンソンの“Art”の意味

ディキンソンは音楽や絵画への造詣が深く、“Art”という単語が見られる詩をいくつか書き残している。その中でも、ディキンソンの芸術に対する深い崇高が見られる有名な詩、“I would not paint—a picture—”(F 348)で始まる詩から考察を始める。

I would not paint—a picture—

I'd rather be the One
It's bright impossibility
To dwell—delicious—on—
And wonder how the fingers feel
Whose rare—celestial—stir—
Evokes so sweet a torment—
Such sumptuous—Despair—

I would not talk, like Cornets—
I'd rather be the One
Raised softly to the Ceilings—
And out, and easy on—
Through Villages of Ether—
Myself endues Balloon
By but a lip of Metal—
The pier to my Pontoon—

Nor would I be a Poet—
It's finer—Own the Ear—
Enamored—impotent—content—
The License to revere,
A privilege so awful
What would the Dower be,
Had I the Art to stun myself
With Bolts—of Melody! (F 348)⁴⁾

第 1 スタンザでは、「絵を描こうとは思わない」、第 2 スタンザでは楽器の「コルネットのように話したくない」、そして第 3 スタンザでは、「詩人になろうとは思わない」、と書かれている。特に第 3 スタンザでは、“Nor”と否定する言葉をスタンザの冒頭に付けて、語り手は「詩人になろうとは思わない」と頑なに拒否する。むしろ、「耳を持つことの方が素晴らしい」と断言する。この「耳」については、ヘレン・ヴェンドラーが、ディキンソン本人を表す提喩だと指摘し (Vendler 149)、体全体でメロディーを受け止め、「気絶する」ほどの感動や衝撃を体ごと受け止めることを表している。それこそが、「芸術」であり、その凄さを感じられる希有な感受性を備えている人であることの重要性が、ここでは語られている。第 1 スタンザでは、「絵画」、第 2 スタンザでは「音楽」、第 3 スタンザでは「詩」というそれぞれ異なるジャンルの「芸術」を並列させている。これらは、ディキンソンが敬愛する「芸術」である。詩に話を戻すと、最後には自分の得意とする分野である「詩」で締めくくることによって、自分こそは読者であり「詩人」でもあるという立場を表明した作品となって

いる。

さらに「芸術」に対して神妙に、かつ神秘的に表現された詩を取り上げる。

The Martyr Poets—did not tell—
But wrought their Pang in syllable—
That when their mortal name be numb—
Their mortal fate—encourage Some—
The Martyr Painters—never spoke—
Bequeathing—rather—to their Work—
That when their conscious fingers cease—
Some seek in Art—the Art of Peace— (F 665)

この詩に登場している「殉教詩人たち」と「殉教画家たち」は、無言を貫いている。これらの人たちは、悲壮な境遇に遭っても耐えて黙々と作品を創作する。たとえ、彼らの最期の時を迎えても、自分たちの作品が生き続けて後世の人々を励ますことを願って。艱難辛苦の中で生み出された「芸術」こそが、名もなき人々の心を癒やし、励まし続けることができる。そして、心が癒やされた「誰か」は、「芸術」の中に「平和」を見つけ、心の充足を得ることができる。それこそが、「芸術」のあるべき姿であり、理想なのだ。ディキンソンは信じてこの詩を書いた。「詩人たち」については、ディキンソンが愛読したキーツなどの詩人たち、「画家たち」については、19世紀に活躍したアメリカの画家、トマス・コールなどの存在が考えられる。ディキンソン自身が、絵画と対峙した時の体験を元に書いたと言える。

“Art”と言えば、その作り手である“Artist”が出てくる詩も興味深い。ここでは、しばしばアンソロジーにも選ばれる1373番の詩を引用する。

The Spider as an Artist
Has never been employed—
Though his surpassing Merit
Is freely certified

By every Broom and Bridget
Throughout a Christian Land—
Neglected Son of Genius
I take thee by the Hand— (F 1373)

この詩では、「芸術家」である「蜘蛛」が、ユーモラスに擬人化されている。小さくて黒っぽいその生き物は、「天才の息子」だと賞賛されている。「蜘蛛」はそのような賞賛にも構わず、体内から白い糸を繰り出して、巣を

作り上げる。その巣はまるで、繊細な白のレース編みのように美しく、芸術的だと語り手は考え、その仕事ぶりを評価している。最後の行では、その職人のような「蜘蛛」の、地道に働く姿に感嘆して、「汝の手をつかまえよう」(“I take thee by the Hand—”)と賛辞を惜しまない。「蜘蛛」は地味ではあるものの、自らの役割を遂行する、「芸術家」としての理想像を体現している。

しかしながら、ディキンソンの“Art”は、単に「芸術」のみを指すとは予測しにくい。その根拠を示す有名な、「自然」は私たちが目にするもの」(F 721 B)で始まる詩の最終スタンザを見てみる。

“Nature” is what We know—
But have no Art to say—
So impotent our Wisdom is
To Her Sincerity— (F 721, stanza 3)

「自然」は私たちが知っているもの／だがそれを言い表すすべを持っていない」と語られるこの行には、どこか違った趣が感じられる。このように日本語に訳してみれば、「芸術」よりも「すべ」の方が意味的にも馴染む。あるいは、両方の意味を内包しているとも考えられる。なぜなら、「自然」は芸術家にとって、重要なモチーフになりうるからだ。これと同じような例として次の詩を取り上げる。

A Thought went up my mind today—
That I have had before—
But did not finish—some way back—
I could not fix the Year—

Nor Where it went—nor why it came
The second time to me—
Nor definitely, what it was—
Have I the Art to say— (F 731, stanzas 1, 2)

語り手の「私」は、ふと頭に浮かんできた「考え」を、言葉で捉えることができずに苦悩している。これこそ、と思った「考え」は突如として脳裏に浮かんでくるものである。しかし、すぐにそれは忘却の彼方に追いやられる。この現象は、誰しも経験するものではあるが、ディキンソンを含む詩人が、詩作に格闘する姿を描いているとも読み取れる。なぜなら語り手は、最後になって、「それが何だったのか、はっきりと／言うすべが私にはなかった」と苦渋の告白をしているからである。ディキンソンにとって、この“Art”を「芸術」と仮定するな

ら、詩を指すことになるが、日本語に直すならば「すべ」、あるいは平たく言えば「方法」に近い意味にとることも可能である。よって、ディキンソンの“Art”は、時に多重的な意味を持ち、まさに「固定すること」(“fix”)が難しいのである。それこそまさに、詩という言葉の芸術の難しさであり、奥深さでもある。ディキンソンが詩人という芸術家として、言葉の魅力を最大限に引き出しながら、詩の世界を構築していることが分かってくる。そして、後生の読者が、詩の言葉の意味を無限に紡ぎ出してくれることを願っていたのである。

Ⅲ エリザベス・ビショップの“Art”の意味

ビショップは詩人として、ディキンソンほど膨大な数の詩を書き残してはいない。そのため、“Art”という言葉が発見できる詩はごく限られているが、その芸術にまつわる代表作の一つである、“One Art”というタイトルの詩を中心に考察を進めていきたい。

The art of losing isn't hard to master ;
so many things seem filled with the intent
to be lost that their loss is no disaster.

Lose something every day. Accept the fluster
of lost door keys, the hour badly spent.
The art of losing isn't hard to master.

Then practice losing farther, losing faster :
places, and names, and where it was you meant
to travel. None of these will bring disaster.

I lost my mother's watch. And look! my last, or
next-to-last, of three loved houses went.
The art of losing isn't hard to master.

I lost two cities, lovely ones. And, vaster,
some realms I owned, two rivers, a continent.
I miss them, but it wasn't a disaster.

—Even losing you (the joking voice, a gesture
I love) I shan't have lied. It's evident
the art of losing's not too hard to master
though it may look like (*Write it!*) like disaster.
(178)⁵⁾

詩全体を通して読み取れることは、「なくす」というネガティブな行為を、むしろポジティブに捉えようとして

いるビショップの強い信念そのものである。しかし、「なくす」には一見して落胆が大きいであろう物、ここでは「家」、「街」、「川」、愛しい人(“you”)をも失っていることが分かる。

次に“Art”という言葉に注目すると、絵画や音楽といったいわゆるクラシカルな芸術を直接的に指しているようには思えない。「なくす」という人間の行為が一つの技であり、芸術なのである。ビショップに言わせれば、「なくす」にも熟練の技が必要なのである。それを繰り返し習得すれば、高邁なもの、言い換えれば別次元のものへ昇華する。このような考え方は、旅を通して出会いと別れを経験したビショップならではののだろう。つまり、この詩には彼女流の人生観が凝縮されているとも言える。彼女自身が多くの土地をめぐり、多くの人々と出会い、何かを捨て、別離を経験するという受容の精神である。その矜持があれば、また新たな出会いや得るものがあるはずである。それは芸術に値するほどの価値の高い行為である。

エレノア・クックが、この詩にはディキンソンの影響が見られると指摘している (Cook 240)。例えば、ディキンソンの 391 番の始まりは、「忘れる方法を知っています! / だけどそれは教えてくれるのだろうか? / 芸術の中でいちばん簡単だと彼らは言う」となっている。つまり、「忘れる」にも「方法」があり、それは自分自身で習得していくものである。“One Art”においても、「芸」の域に達するまでには、孤独を強いられ、誰も力を貸してくれない。だから自分自身で「練習」を積み重ねていく。それを極めたときに、「芸術」と呼ぶに値するものに変容する。この考え方についても、ディキンソンの著名な詩、“I held a Jewel in my fingers” (F 261) では、「宝石」が「指」から消えてしまっても、落胆するのではなく、むしろ心の余韻に浸るような感覚へ誘われる、と語られている。

次に、ビショップの“Poem”の冒頭部分を引用する。

About the size of an old-style dollar bill,
American or Canadian,
mostly the same whites, gray greens, and steel grays
—this little painting (a sketch for a larger one?)
has never earned any money in its life.
Useless and free, it has spent seventy years
as a minor family relic
handed along collaterally to owners
who looked at it sometimes, or didn't bother to.
(176, ll.1-9)

この詩は、「旧式のドル紙幣」を小さなキャンバスに例え、まるで絵画を鑑賞するかのように、色彩感覚溢れる言葉（“whites, gray greens, and steel grays”）を並べて書き連ねている。こうした色彩を使用するスタイルは、ビショップの他の詩、「サンドパイパー」（“Sandpiper”）という詩を彷彿とさせるが、画家としても才能があったビショップらしい一面が垣間見られる。そして「ヴィジョン」という言葉がでてくる箇所を引用する。

Our visions coincided—“visions” is
too serious a word—our looks, two looks :
art “copying from life” and life itself,
life and the memory of it so compressed
they’ve turned into each other. Which is which?
(177, ll.50-54)

この箇所では、ビショップの芸術論が提示されている。一般的に「ヴィジョン」は「とてもシリアスな言葉」であり、難解な意味を持つ言葉である。かみ砕いて言えば、目で見えて記憶した物を「まねること」が、芸術の手法だと定義されている。この詩の大枠の意味は、「ドル紙幣」を1枚の絵に例え、その中で色とりどりの言葉を重ねながら、目で見えて心で描いたものを繰り返し紙に転写するということである。十中八九、ビショップは絵を描くとき、この「ヴィジョン」の概念を強く意識していただろう。小文字で書かれている“art”の意味は、「人生を写し取る芸術」、すなわち、画家に必要とされる術や資質をも表す。しかしここでは、絵画的な要素が強いことから、「芸術」とまで言い切ることは可能である。この詩のタイトルが、“Poem”なのは、ビショップが画家でもあり、詩人でもあったことの影響が強い。一方で、ディキンソンが書いた、紫色などの色とりどりの言葉を使用した美しい夕暮れの詩は、それがまるで1枚の絵画のように心の中に映し出されてくる。ディキンソン自身は目の病気を抱えていたため、それを補うために、卓越した洞察力で物事を見極め、それを詩の言葉で表現しようと努力した。一方でビショップもまた、「ヴィジョン」という心で見える行為を重要視し、次々に詩という芸術作品へと完成させた。その詩人としての行為は、先輩詩人のディキンソンから、後輩詩人のビショップへと受け継がれている。

この章で考察したように、ビショップは、詩を書きながらも画家としての才能を最大限駆使したことが分かる。つまり画家のような観察力を持つ詩人として、そして旅を愛する詩人として、目で見えて感じたものを詩で再現しようとしたのである。結果的にはそのことによっ

て、ビショップは、20世紀アメリカが生んだ希有な詩人として評価されることにつながった。

IV 結論

これまでの考察で、ディキンソンとビショップの詩を読み比べながら、“Art”をめぐる二人の詩人たちの考え方を考察した。これら二人の詩人たちが、時代や家庭環境の違いはあるとしても、二人を結んだのは、ジョンソン版の『ディキンソン全詩集』だった。一見、対照的な二人ではあっても、ビショップはディキンソンの詩を読んで多くの学びを得たことが推測できた。ビショップの詩の中には、「芸術」の他にも、「火山」や「鳥」をモチーフにした詩が多いからだ。これは少なからず、ディキンソンからの影響を受けていたと首肯できる。

“Art”については、「芸術」という意味で、ディキンソンは、「絵画」や「音楽」などの古典的な「芸術」が持つ崇高性を大事に使用していた。他方で、「芸術」だけではなく、「すべ」と訳せる詩においても、高度な技、言い換えれば、人知を超えた芸術的なレベルのニュアンスが含まれている。ビショップの“One Art”では、「なくす」という日常的な行為を、悲観的に捉えるのではなく、詩の中では技を必要とするほどの高いレベルにまで高めている。また、このことはⅢ章で考察したように、少なくともディキンソンの何編かの詩が、ビショップに影響を与えたと言っても過言ではない。

ビショップの“Poem”では、“Art”という言葉の他にも、「ヴィジョン」（“visions”）という言葉が多用している。これは、ディキンソンも重要視していた抽象名詞である。この言葉の意味は、視覚的な要素、例えば目で観察することと、心の眼で見ることの両方である。それら両方の行為は、言葉で言い表すこと、端的に言えば、詩を書くことにもつながる重要な要素を含んでいる。

生涯のほとんどを自宅で過ごしたディキンソンも、「旅」をテーマにした詩を書いている。ビショップの方は、自らの経験を元に、「旅」の範囲をさらに拡大していき、「旅」の詩と言えばビショップと評価されるまでになった。ディキンソンは自宅に引きこもってピアノを弾き、また絵画にも造詣が深かった。ビショップは、絵画集を出すほどに絵を描くことにも専心していた。そういう芸術的な特技を活かしながら、詩作の幅を広げていった。二人の詩人たちの詩作のスタイルは大きく異なるものの、ビショップの方は、同じマサチューセッツ州の先輩詩人を超えたいという心に秘めた意思があっただろう。それは、先輩詩人のディキンソンを、心の内では偉大な先輩詩人として認めていることの裏返しでもある。ディキンソンの詩の偉大さを認め、強靱な精神力を持つ

この先輩詩人に内心は敬意を払っていたはずである。そして、試行錯誤する中で、ディキンソンのスタイルをただ模倣するのではなく、むしろ独自の詩のスタイルと、物事への見方を確立していった。ディキンソンは、先輩にあたるエマソンのエッセイや詩を読んで多大な影響を受けた。それでも、保守的な土地柄のアマーストで隠遁し、あえて強い反骨心でもって 1800 編近い詩を書き残すことができた。ビショップも同様に、ディキンソンという偉大な詩人を心の中で認めつつ、粉骨砕身の努力を積み重ねて自己のスタイルを確立した。ビショップが、今世紀になっても評価され続けているのは、19 世紀最大の詩人であるディキンソンのおかげでもある。このように二人の詩人たちは、それぞれが詩人として、各自のスタイルの詩を書き続けることによって、自分たちの“Art”を創作していったのである。

※本稿は、日本エミリー・ディキンソン学会第 33 回大会において、口頭発表した原稿に加筆修正を行ったものである。

注

- 1) ビショップと「旅」については、松本による論文「詩人たちの旅路－エミリー・ディキンソンとエリザベス・ビショップの詩から」(*The Emily Dickinson Review*. No.5. 日本エミリー・ディキンソン学会発行、2018 年、pp.9-20)を参照。
- 2) Thomas H. Johnson and Theodora Ward, editors, *The Letters of Emily Dickinson* (Cambridge Massachusetts : The Belknap P of Harvard UP, 1958).
- 3) Robert Giroux, editor, *One Art : Elizabeth Bishop* (New York : Farrar, Straus and Giroux, 1994).
- 4) 本論での詩の引用は、すべてフランクリン版からとし、(F 348) のように括弧に入れて示す。
R. W. Franklin, editor, *The Poems of Emily Dickinson* (Cambridge Massachusetts : The Belknap P of Harvard UP, 1998) 373-374.
- 5) Elizabeth Bishop, *The Complete Poems 1927-1979* (New York : Farrar, Straus and Giroux, 1974) 178. ビショップの詩の引用は、詩集のページ数を括弧に入れて示す。

Works Cited :

Bayley, Sally. *Home on the Horizon : America's Search for Space, from Emily Dickinson to Bob Dylan*. Oxfordshire : Peter Lang Ltd, 2010.

- Bishop, Elizabeth. *The Complete Poems 1927-1979*. New York : Farrar, Straus and Giroux, 1974.
- Bloom, Harold, editor. *Elizabeth Bishop*. Broomall : Chelsea House Publishers, 2002.
- Budick, E. Miller. *Emily Dickinson and the Life of Language : A Study in Symbolic Poetics*. Baton Rouge : Louisiana State UP, 1985.
- Cady, Edwin H. and Louis J. Budd, editors. *On Dickinson : The Best from American Literature*. Durham : Duke UP, 1990.
- Cook, Eleanor. *Elizabeth Bishop at Work*. Cambridge, Massachusetts : Harvard UP, 2016.
- Eberwein, Jane Donahue, editor. *An Emily Dickinson Encyclopedia*. Westport : Greenwood P, 1998.
- Farr, Judith. *The Passion of Emily Dickinson*. Cambridge Massachusetts : Harvard UP, 1992.
- Franklin R. W., editor. *The Poems of Emily Dickinson*. Cambridge Massachusetts : The Belknap P of Harvard UP, 1998.
- Giroux, Robert, editor. *One Art : Elizabeth Bishop*, by Elizabeth Bishop. New York : Farrar, Straus and Giroux, 1994.
- Grabher, Gudrun, Roland Hagenbüchle, and Cristanne Miller, editors. *The Emily Dickinson Handbook*. Amherst : U of Massachusetts P, 1998.
- Johnson, Thomas H. and Theodora Ward, editors. *The Letters of Emily Dickinson*. Cambridge Massachusetts : The Belknap P of Harvard UP, 1958.
- Leiter, Sharon. *Critical Companion to Emily Dickinson : A Literary Reference to Her Life and Work*. New York : Facts on File, 2007.
- Millier, Brett C. *Elizabeth Bishop : Life and the Memory of It*. Los Angeles : U of California P, 1993.
- Phillips, Elizabeth. *Emily Dickinson : Personae and Performance*. London : The Pennsylvania State UP, 1988.
- Pollak, Vivian R. *Our Emily Dickinsons : American Women Poets and the Intimacies of Difference*. Philadelphia : U of Pennsylvania P, 2017.
- Sewall, Richard B. *The Life of Emily Dickinson*. Cambridge, Massachusetts : Harvard UP, 1974.
- Smith, Martha Nell and Mary Loeffelholz, editors. *A companion to Emily Dickinson*. Malden : Blackwell Publishing, 2008.
- Socarides, Alexandra. *Dickinson Unbound : Paper, Process, Poetics*. Oxford : Oxford UP, 2012.
- Travisano, Thomas L. *Elizabeth Bishop : Her Artistic Development*. Charlottesville : UP of Virginia, 1988.
- Vendler, Helen. *Dickinson : Selected Poems and Commentaries*. Cambridge, Massachusetts : The Belknap P of Harvard UP, 2010.